

二少年の話

小川未明

青空文庫

達ちゃんたつの組くみに、田舎いなかから転校てんこうしてきた、秀ちゃんひでという少し年ねんがありました。住すんでいるお家うちも同じおな方ほう向こうだったので、よく二人ふたりは、いっしょに学がっ校こうへいったり、帰かえったりしたのであります。

ある日ひのこと、達ちゃんたつは、夕飯ゆうはんのときになにか思おもい出だしてくすくすと笑わらいました。

「なにか、おかしいことがあったの。」と、お姉ねえさんがおっしやいました。

「きよう、秀公ひでこうといっしょに帰かえったら、鳥屋とりやの前まえで、いろいろの鳥とりが鳴ないているのを見みて、ああ、うそが、琴ことを弾だんじているとい

つたんだよ。」と話しました。

「うそつてなあに？」と、お姉さんがたずねられました。

「姉さんは、まだ、うそという鳥を知らないのかい。べにがらのように赤くて、もっと大きい鳥なんだよ。じゃ、姉さんは、文鳥を知っているだろう。ちようど、あんなような鳥なのさ。」と、達ちゃんはいいました。すると、こんど、お兄さんが、「うそなら、寒い方ほうにいる鳥だ。そして、それがどうしたというんだい。」と、きかれました。

「秀公ひでこうが、小さいとき、おばあさんから、昔話むかしばなしをきいたんだって。昔あるお姫さまが、悪者わるもののためにさらわれていつて、沖の島おきしまで、一生しよゝと独りさびしく琴ことを弾だんじて送おくると、死しんでから、そ

の魂たましいがうそになつたというのだよ。それで、うそがさえずつていたので、秀公ひでこうが、琴ことを弾だんじていると聞いたんだそうだ。僕ぼく、なんのことかわからなかつたのさ。」

達たつちゃんが、思おもい出だして笑わらうと、姉ねえさんもその意い味みがわかつて、笑わらわれたのでした。

「だが、おもしろいお話はなしじやないか。」と、兄にいさんは、いわれました。

「また、秀公ひでこうの生うまれた村むらから、日に本ほん海かいは近ちかいんだつて。海うみへいく道みち端ばたに、春はるになると桜さくらが咲さいて、それはきれいだといつていたよ。」

「春はるは、田舎いなかがいいだろうからな。」

「秀公は、やはり田舎がいいといっていた。」

「秀ちゃんて、どんな子？」

「できないので、先生にしかられてばかりいるのさ。」

「こういうと、お姉さんは、達ちゃんをにらみました。」

「自分だって、できないくせに、ひとのことを悪くいうもんでないわ。」

これをきいて、お父さんも、お母さんも、お兄さんも、みんながお笑いになりました。

その、あくる日の、晩ご飯のときでありました。いつものように、みんなは、めいめいきまった場所にすわって、食事をしましたが、すんでしまうと、またいろいろお話が出たのであります。

「秀公ひでこうは、どうしたい。」と、お兄さんにいが、思い出しおもいだして、おききになりました。達たつちゃんちゃんは、片手かたてにはしを握にぎって、目めをかがやかしながら、

「秀公ひでこうのやつ、また、きょう先せん生せいにしかられて、おかしかったよ。」

「よくしかられるのね。」

「田舎いなかの学が校っこうのほうが、しかられなくて、よつぽどいいといっていた。」

「どうして、しかられたの。」と、お姉さんねえが、たずねました。

「運うん動どう場じょうのもちのきを折おって、もちを造つくるのだといつて、石いしの上うへで、コツ、コツたたいているところを、先せん生せいに見みつかった

のだ。そして、この寒いのに、三十分も立たされたんだよ。」

こういうと、お兄さんは、考えていられましたが、

「広々とした、田舎で自由に育ったものから見たら、この都会は、せせつこましいところがちがいない。」といわれたのです。

「こんど秀公が、うちへ遊びにくるって。」

これを、おききになつて、お母さんが、

「だれとでも仲よくしなければ、いけませんよ。」と、おつしやいました。

「達ちゃんは、ひとのことばかりが、自分だつて、しかられることがあるのでしよう。」と、お姉さんが、いわれました。

「だれが、しかられなんかするものか。」と、達ちゃんは、耳の

あたりを赤くしたのです。

ある日のこと、秀ちやんが、達ちやんの家へ遊びにきました。ちようどお姉さんも、家にいらつしやいました。

達ちやんと、いっしよにへやへはいつてきた秀ちやんは、

「こんにちは。」と、快活に、お姉さんにむかつて、丁寧

あいさつをしました。

一目見て、元氣そうな、目のくりくりした子供でしたから、お

姉さんも笑つて、

「いらつしやい。」と、あいさつをなさいました。

秀ちやんは、はじめてのお家へきたので、かしこまっています。だが、だんだん慣れると、さっぱりとした性質ですから、話

かけられれば、はきはき、ものをいいますので、すぐにみんなとうちとけてしまいました。

いろいろと話をしているうち、ふいに、

「うちの達ちゃんたっは、学校がっこうで、先生せんせいにしかられたことがあつたでしょう。」と、お姉さんねえは、秀ちゃんひでにおききになったのです。そして、なんというかと、秀ちゃんひでの顔かおをごらんになりました。

はきはき話はなしをしていた秀ちゃんひでは、急に口くちをつぐんで、両りょうほう方のほおをあかくしながら、達ちゃんたっの顔かおを見みました。そして、笑わらつて、さすがにだまつていました。

「ねえ、しかられたことがあるでしょう。」と、お姉さんねえは、顔かお

をのぞくようにして、おききになりました。

「おい、秀公ひでこう、だまつている。」と、達ちゃんたっは、おどすような剣幕けんまくをして、いいました。

「達ちゃんたっ、そんなことをいうのは、卑怯ひきょうですよ。」と、お姉さんねえは、達ちゃんたっをたしなめなさいました。

じつは、今日きょう、学校がっこうで、達ちゃんたっは先生せんせいにしかられたのでした。それは時間じかん中に、砂場すなばで採取さいしゆしてきた砂鉄さてつを紙かみの上うえにのせて、磁石じしやくで紙かみの裏うらを摩擦まさつしながら、砂すなをびよんびよんとおどらせていたのを、先生せんせいに見みつかつたからです。もし、このことを秀ちゃんひでが、お姉さんねえに話はなしたら、お姉さんねえが、家うちじゅうのひとはなし人に話はなしして、たいへんだと思おもつたからでしょう。

「ねえ、秀ちゃん、正直におつしやいよ。」と、お姉さんは、おききになりました。

元来、なんでもきかれれば、知っていることは、はきはきと話す性質の秀ちゃんですから、いまにも、そのことが、口からもれやしないかと達ちゃんは、気が気でなかつたのでした。

「しかられたことはないけれど、笑われたことがあつた。」と、秀ちゃんが、いいました。それは、秀ちゃんの口もとを見つめていた、達ちゃんにも意外にきこえました。

「まあ、笑われたつて、どんなことがあつたの。」と、お姉さんは、はやくききたかつたのでした。

「栗鼠のことを、くりねずみといったんで、みんなが笑つたんだ

。「と、秀ちゃんひでが、答えたこたので、お姉さんねえも、吹き出ふして、
「達ちゃんたつ、おまえ、くりねずみといつたの？」と、お笑いわらにな
りました。

達ちゃんたつは、秀公ひでこうが、どんな自分じぶんの困こまることをいいだすだろ
うと、内ない心しんびくびくしていたのですが、なにこれくらいのこと
なら、そう恥はずかしくないと安心あんしんしたのでした。そして秀公ひでこう
の、やさしいのに感かん心しんし、またありがたくも感かんじたのでありま
す。

お姉さんねえは、達ちゃんたつが、どんなことを思おもっているかわからな
いものだから、

「そんなことまちがって、どうするの。遊あそんでばかりいて、勉べんき

強^{よう}をしないからですよ。」といわれました。

「知^しつていたんだけど、ただ、ちよつとまちがっただけなんだよ。」と、達^{たつ}ちゃんは、口^{くち}ではこんな負け惜^ましみをいいましたけれど、学^{がっこう}校^{がっこう}でみんなが笑^{わら}つた、あのときのことを思い出^{おも}すと、きまりが悪^{わる}くなりまりました。

秀^{ひで}ちゃんは、いつまでも、そんなことを思^{おも}つていませんでした。「君^{きみ}、なにか、おもしろい雑^{ざつし}誌^しがない？」と、秀^{ひで}ちゃんが、いいました。

「あるよ。」と答^{こた}えて、達^{たつ}ちゃんはこれをいい機^き会^{かい}に立^たち上^あがりました。そして、いろいろの本^{ほん}や、雑^{ざつし}誌^しを出^だしてきて見^みせました。二人^{ふたり}は、それからおもしろく遊^{あそ}んだのであります。

その夜、お姉さんは、秀ちゃんからきいた話をなきたので、みんなが笑いました。

「達ちゃんは、自分が笑われたことをちつとも話さないのね。」
こうお母さんが、おっしやると、達ちゃんはなんとも返事ができませんでした。そして、心の中で、秀公がよく、自分が砂鉄でいたずらをしてしかられたことをだまっていってくれたと、いくたびも感謝して、これから、自分もひとのことをいわないようにしようと思いました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「二一少年《しょうねん》の話《はなし》」
となっております。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2011年12月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二少年の話

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>